

け英語を話せるようになるのだ」という確信に、いつのまにか変わりました。仕事上、読んだり書いたり、聞いたり話したり、生活のなかで英語を使っていると、誰でも英語にふれていなければならないほど、確実に話せるようになるのだなあ実感します。

例えばここ数年、どうしても会いたかった研究者が来日したり、海外で学会発表したり、何かと英語を話す機会がふえました。とはいえ、何もしなければ英語は上達しません。けれど、研究教育に育児。とても特別なことをする時間は今の私にはありません。一方、幼い我が子を見れば、ただ大人の会話を聞いているだけなのに、少しずつ少しずつ、毎日確実に、日本語が進歩しています。これはちょっと悔しい。考えてみれば、留学しても、そう長時間英語でおしゃべりするわけではないでしょう。語学習得ばかりに時間をかけてもいられないはずです。それでも英語が進歩するのは、数時間でも英語にふれ、何かにつけて英語を自己表現として使うから、話せるようになるわけです。

そこでお勧めしたいのは、毎日、英語を聴くことです。BGMのように英語を聞き流すだけの学習です。これならスイッチを押すだけで（家族には迷惑がられました）、とても簡単。いつもはBGMですが、パソコン作業で目がつかれたとき、気分転換したいとき、頭にいつもと違う刺激が欲しいときなど、ちょっとした瞬間には真剣に聴きます。どれだけ聴き取れるかをゲーム感覚で楽しむこともあります。そして使える表現があれば頭にしっかりインプット。確実に表現もふえるし、聴き取り能力もアップします。スイッチを押すだけで、聞けば聞くだけ確実に進歩するのです。成果は自分を裏切りません。単純ですが、これは馬鹿にできません。この年齢の私が、確実に効果を実感しますから、若い皆さんには絶対におすすめです。お茶大在学中に、英語がペラペラになるかもしれません！！

ところで昨年のこと。学会でアメリカのインディアンの住む田舎町まで約28時間もかけて行ってきました。日本人観光客などめったにない土地柄ですから、土産物屋でも居酒屋でも、日本人というだけで珍しがられるほどでした。世界各地からの参加者と交流し、夢のように楽しい数日間でした。そしていよいよ帰国の日。明け方3時頃、ホテルでチェックアウトし、迎えにくる空港までのバス（そんな時間に出発しないと飛行機に間に合わないほど田舎だったのです）をフロントで待っていた時のことです。誰もいないロビーで、チェックアウトしてくれたスペイン語まじりのフロント係の女性が、突然、まったくなまじりない日本語で、「ありがとうございます」と頭を下げるのです！まるで日本人のように。びっくりして、「パーフェクトな発音ですねえ、驚きました」と英語でいうと、「実は・・・」と思いがけない身の上話。

研究者である父親の転勤で、小学校入学まで日本に住んでいたこと。日本では温泉旅行など楽しい思い出しかないが、もはや「ありがとうございます」が唯一覚えている日本語であること。米国に帰国しても英語が全く話せなかったため、日本語と発音が似ているスペイン語をまず覚え、スペイン語から英語に転じたこと。最近の米国の経済事情や国際関係のまずさ。医療保険など社会保障の不十分な現状で、田舎暮らしはつねに健康の不安にさらされていること。貧しいこの街では、大学教員でさえも複数のアルバイトが必要なくらい経済が逼迫していること。幼い子を残して朝も夜も働いている無念さ厳しさ。それでも、拝みたくなくなるくらいすばらしい四季のうつろいのあるこの地を離れたくないこと、などなど。バスがなぜか大幅におくれたこともあって、ずいぶんと話し込みました。

ふりかえると彼女は、もう二度と会わないであろう偶然出会った「なつかしい日本」からの客人と2人きりになっ

た瞬間に、普段は誰にも語らない語れない思いの丈が、あふれてきたのかもしれませんが。同年配の子育て中の女性として、「抑圧」のなかを生きる女性として、思いがけなく出会った彼女のあふれるような思いは、忘れられないものでした。

心を動かすのは言葉を越えたものです。けれど、やはりそこに言葉がなければ、出会いの機会もありません。BGM学習の成果？で、普通の人の心の叫び、まさに肉声をじっくりと聞いたことは、さまざまなことを感じさせる印象深い体験でした。

言葉はコミュニケーションの道具です。道具は使いよう。使わなければ進歩もありません。使えば思いがけない出会いや視野の広がりが必ずあります。そして日本語でさえそうであるように、完璧な言語習得はなく、どこまでも奥の深い世界です。完璧はないのだから、足りない力は「度胸」と持てる「コミュニケーション能力」の総動員でカバーです。

学会で、ホテルで、街で、地元の人々や、紛争下の国などさまざまな国からの参加者と交流し、それぞれの肉声を聞いたことで、ますます言葉の大切さを感じるようになりました。同時に、なんだか英語だけではものたりなくなってきました。英語を話さない国もたくさんありますし、少しでも多くの言葉を話せたらそれだけ相互理解の範囲が広がります。最近では、ハンガリーやスペイン語、はるか昔ならフランス語など、いろいろな外国語のCDを「BGM」にしています。

最後に、私が感じる語学習得のコツ。できないと思ったら、語学習得は絶対できません。杓子定規に文法を考えながら言葉を話す人はいないので、難しい文法や何やらを無理に覚えようとはしない。あくまで必要に応じてマイペース。自分に必要なことから自然に覚えていけばいいのだと思います。（ちなみに、無謀な母親の私に、3歳でアメリカ人に預けられそうになった我が子は、必死に考えた末、「おしっこしたい」「のどかわいた」だけは英語で話せるようになりたいと真剣に練習していました（笑）。必要こそ最大の教師です！）。

「失敗は成功のもと」と考え、少々の間違いやできなさには目をつぶる。少しでも進歩すればそれでOK。努力は裏切りません。

お茶大生には幸い英語の基礎力があるはず。それはとても貴重なことです。あとは使おうとすること。目的をもって、練習に励むこと・・・あと〇〇年若かったら、もっと記憶力がよくなったのに！と日々思う私は、みなさんの可能性がもったいなくて仕方ありません。だまされたとって、今日から、BGM学習。おすすめします。

## 無口な人でも英会話がうまくなれる？

小林 哲幸

朝日新聞に「三枝の笑ウインドウ」というコーナーがあるのをご存じだろうか。毎週、読者から寄せられたちょっとした小話（笑品）がいくつか掲載され、それらについて落語家の桂三枝が評価を値段で表すコーナーである。結構笑えるものも多く、私が楽しみに読んでいるものの一つである。そこで最近、満額の評価をえたものが次の小話である。

“普段無口な父がミニ英会話番組を見ていた。講師が「一緒に発音してみましょう」と言うのに合わせて、父も声を出して発音練習をしているのを見て、母がボソッとつぶやいた。「英語より日本語で会話する練習して欲しいわ」”

かく言う私も家では無口な父で通っている。というのも、家族が総じておしゃべり好きなために、日常生活において

私が声を発する間も必要性も余りないからである。会話における口数は、母国語や外国語を問わずに相対的なものであり、聞き上手もまた必要である。

ところで一般に、おしゃべりな人ほど英会話の上達は早いと言われる。私の経験から考えても、これは正しい命題と思われる。好きこそものの上手なれである。では、無口な人は英語がうまくなれないのであろうか。そもそも「英語がうまい」とはどういうことであらうか。一般に、実用英語とは英語を「話すこと」と捉え、英会話学校もテレビの英会話番組も話す訓練に重点をおいている。しかし、実際の英会話においては、自分が話すよりも聞く場合の方がはるかに多い。実用英語の上達は聞く訓練が基本にあると思う。いくら話せても相手の言っていることが聞き取れないのでは会話にならない。聞き上手は英会話上手になれるのである。超整理法などの執筆で有名な、あの野口悠紀雄氏も最近の著書「超英語法」(講談社)で、自身の経験に基づいて同様の考えを述べている。その中で、「聞ければ自動的に話せる」とまで言い切っているが、その理由として、日常英会話では、相手に助けられながら話すことができるからと述べている。まったく同感である。

今は便利なことに、インターネットを通じて生の英語を容易に聞くことができる。例えば、日本版 Yahoo サイトで、「Online News Hour」を入力して検索すると、アメリカの公共放送局 PBS が提供するニュースサイトが見つかる。最新のニュースが Transcript 付きで聞けるので、音声と照合しやすい。通常のニュースの他に Science report のコーナーもあるので、ぜひ一度、視聴されることをお勧めする。

とにかく、浴びるほど英語を聞くことが上達の秘訣のようである。

## 理系研究者にとっての外国語

武次 徹也

私がこれまでに学んだことのある外国語は、英語とドイツ語である。ドイツ語は大学の教養の頃に第二外国語が必修だったので履修し、大学院の入試で必要だったので学部4年の夏にも集中的に勉強した。英語とドイツ語は文法上類似点が多く、今でも辞書さえあればある程度は読めると思うが、その後必要に迫られることは全くない。英語さえきちんと読み書きできれば、少なくとも研究で困ることはないといえる。しばらくして大学院の入試の科目から第二外国語がなくなったが、英語以外の外国語を学ぶということは特定の目的がある場合を除いて、今では教養としての意味しかないように思う。4月に八王子セミナーハウスに出かけて1年生に科目履修について説明しているとき、将来研究者を志望する場合にはドイツ語を取っておいた方がよいのか、という質問を受け、少し懐かしい感覚を覚えた。

学部4年になって研究室に配属されると、英語との付き合いが日常的になってくる。研究の情報を得るためには英語で書かれている論文に目を通さなければならないが、最初は慣れないので斜め読みができず、まず日本語に全訳してから内容を理解しようとしていた。だんだん目を通さなければならない論文が増えてくるとすべてを全訳することは不可能となり、それでも論文をコピーし続けているうちに自然と斜め読みができるようになっていたようだ。そのうち斜め読みすらしない論文を大量にコピーして満足するようになり、コピー時にページをめくったときチラッと見える情報が重要なんだと研究室の仲間と笑っていたが、更に年月を重ねると、コピーした論文をどこに片付けたかわからない状態になった。何度か整理を試みたことがあるがとてもしつこく、今に至っている。最近では pdf file としてパソコンの中で文献を整理できるようになってきたので、

以前のように物理的に場所を取ることはなくなったが、とりあえずどこかにしまいこんで安心してしまいう傾向は変わらないようである。

大学院も学年が進んでくると、博士号取得の条件が気になってくる。私の場合、博士号を取得するためには専門誌に3報の論文が受理されることが条件として課されていた。学生にとって、英語で論文を書くというのは一つの大きな壁だと思う。論文とは単なる英作文の積み重ねで仕上げるものではなく、全体として見ても細部を見ても論理構造のしっかりとした構築物でなくてはならない。さらに日本語と英語の違いもある。教官にとっては、学生が書いたものを直すよりも最初から自分で書いてしまう方が速いのだが、それでは学生はいつまでも自分で英語論文を書けるようにならない。そこで、論文を書く上での基本的手順やコツを教えた上でとにかく学生に頑張ってもらって論文を書いてもらい、教官が赤でチェックし、それを見て学生が原稿を改訂する、という作業を地道に繰り返すことで伝授するしかない。最初のうちは学生が書いた文章は全滅することもあるが、注意を受けたポイントを着実に身につけていく学生は、5報目くらいでかなりまとめた論文を書けるようになる。

私自身は結構のんびりしていて、博士課程2年生になった春に最初の論文を投稿したが、その論文はそのままでは受理されず、レフリーからかなり注文が来た。新しい反応理論を提案したかなりチャレンジングな論文であり、投稿した専門誌もかなり水準の高いものだったので、今考えると無理からぬ反応であった。その後、レフリーの指示に従って新たに追加の計算を行い、論文を改訂しようとしたのだが、その作業が実に大変だった。実は、この論文は指導教官であった平野恒夫先生(現名誉教授)が非常に力を入れていた研究をまとめたもので、ほとんど先生が書かれた論文であった。そのため論文としての完成度が高く、部分的に手を入れようとするとも全体の調和が崩れてしまうように思われ、全体としての整合性や文章の格調を保ちつつ改訂することは当時の自分には至難の業であった。結局、この論文は、博士課程3年生になってから2報に分割することにかなり大胆に書き直し、その過程で自分の論文となった。博士課程の最後の1年間、平野先生によるマンツーマンでの丁寧な指導のもと英語論文をひたすら書きつづけた1年間であり、先生の論文スタイルを徹底して伝授して頂いた1年間であった。

博士号を取得して半年経った9月、アメリカのアイオワ州立大学にポスドクとして留学することになった。英語で論文を書くことについては少し自信が芽生えていたが、英語でコミュニケーションをとることについては全く自信がなかった。読み書きや英文法には自信があったが、それだけでは英会話は成り立たない。頭で英作文して話していたのでは追いつかず、最初は単語を一生懸命並べて意思の疎通を図ることが精一杯で、文法的に正しい文章で会話をするという余裕はまったくなかった。研究について細かい議論を行うことも最初は困難で、隣の部屋にいる先生と電子メールで議論したこともある。幸い、受け入れてくれた教授は日本人の研究者を何人も受け入れてきた先生で、あまり主張はしないが仕事はしっかりするという日本人の特質をよくわかってくれており、辛抱強く付き合ってくれた。アメリカにはちょうど1年間滞在したが、英会話能力は身についたとは言えない。しかし、何とか意思疎通を成立させるための技術と根性は身についたように思う。

その後、数年を経てお茶大化学科にお世話になることになった。お茶大に赴任して1年半経った頃、文部省在外研究員としてケンブリッジ大学に半年間派遣して頂けることになった。滞在先の研究室の先生は年齢も比較的若い若い先生だったが、精力的にバリバリ仕事をこなすエネルギー